

# 幼稚園に於ける保育者の役割についての研究 —保育者の言葉がけが幼児の遊び行動に及ぼす影響—

A Study of the Role of the Teacher in a Kindergarten:  
Influence on the Infants' Play Activity by their teacher's Call Words

大久保英哲  
Hideaki OKUBO

岩崎 裕香\*  
Yuka IWASAKI\*

## 1. 問題と目的

身体や心の発育・発達が著しい幼児期において、「遊び」はとても重要な役割を持つ。なぜなら、幼稚園における幼児の生活の中心は遊びであり、運動遊びを通して身体を動かす楽しさを知ったり、運動能力を発展させ、また集団遊びを通して友人関係を築き上げたり、ルールを守る・工夫するといった社会性や創造性などの内面的な能力を身に付けることが出来るからである。

しかし、近年は遊び環境の変化や少子化、幼児の特性の変化に伴い、体力低下、主体的な遊びの減少、一人遊びの増加など、幼児は多くの問題を抱えている。これらの問題を解決するために、また遊びを充実させ、幼児の身体や心の発育・発達を促進させるために、保育者の様々な働きかけはとても重要な役割を果たすものである。保育者の幼児に対する働きかけは数多く存在するが、その中でも保育者の幼児に対する言葉がけは幼児の気持ちに大きな影響を与えることが出来、気持ちの変化によって主体的な遊びが促進されたり、遊びの中での運動量を増加させたりすることにつながるのではないかと考えられる。

そこで、本研究では保育者の言葉がけによる援助に着目し、運動遊びと集団遊びの二つの要素を取り入れた「鬼ごっこ」の場において、従来から幼児の運動量を知るための測定に多く用

いられている万歩計による運動量の測定と、岡澤<sup>1)</sup>によって標準化された「幼児の運動遊び場面での有能感テスト」を参考に作成した「鬼ごっこ用有能感・受容感テスト」による幼児の有能感、受容感の測定を実施した。そして、保育者の言葉がけに伴うその変化を比較・検討することで、幼児の遊び行動を充実させるためには、保育者のどのような言葉がけが必要とされているのか明らかにしていきたい。

## 2. 方法

幼稚園年長児26名及びその担任保育者1名を対象とし、幼児の鬼ごっこにおいて、保育者の言葉がけを4場面設定し、4日間にわたって実験を行った。

### 1) 対象及び各場面測定件数

金沢大学附属幼稚園年長児26名（男児13名、女児13名）、及びその担任保育者1名を対象にし、測定した。対象児は担任保育者との話し合いにより実験内容に最も適した人数を考え、2つにグループ分けした。グループ分けに関しては、ランダム抽出によって、男女の比率がほぼ等しくなるように行った。設定した言葉がけ場面における運動量（万歩計による歩数、移動距離の測定）、有能感・受容感テストの測定件数は表1に示した。なお、測定結果に関しては、極力保育者の言葉がけの影響による変化を正確

に見るため、全場面参加した幼児の結果のみを採用了。4場面全てに参加した幼児は19名であつた。(男児9名、女子10名)

表1 測定対象幼児及び測定件数

測定対象幼児			各場面の測定件数				
グループ	性別	人数	場面Ⅰ	場面Ⅱ	場面Ⅲ	場面Ⅳ	計
Aグループ	女児	7	7	7	6	6	26
	男児	6	6	4	6	6	22
	計	13	13	11	12	12	48
Bグループ	女児	6	6	6	6	6	24
	男児	7	7	5	6	6	24
	計	13	13	11	12	12	48
合計		26	26	22	24	24	96

## 2) 測定時期及び時間

2006年10月23、24、25、27日の4日間にわたり測定をお願いし、対象幼児26名より延べ96件の測定を行った。(表1を参照)なお、鬼ごっこの時間は、協力していただいた幼稚園の自由遊びの時間に設けてもらい、測定を行った。

## 3) 保育者の言葉がけ

### ◆保育者の言葉がけカテゴリとその使用例

事前に行った模擬実験における保育者の言葉がけ内容の分析結果と、山崎<sup>2)</sup>が作成した言語的応答の分析カテゴリを照らし合わせ、その

結果を参考に保育者の言葉がけを以下の9つにカテゴリ化した。①励まし、②指示的リード、③非指示的リード、④状況の説明、⑤情報の伝達、⑥繰り返し、⑦代弁、⑧相手への注目、⑨発問である。また、杉村・桐山<sup>3)</sup>が示している保育者の指導方法を参考に、①～⑤のカテゴリを意図的方法(保育者の枠組みで子どもの行動をより望ましい方向に方向づけるもの)を用いた言葉がけ、⑥～⑨のカテゴリを受容的方法(その子どもの感情や行動を尊重し、共感し、子どもの枠組みの内側から子どもの成長を援助していくもの)を用いた言葉がけとした。

表2 保育者の言葉がけの分析カテゴリとその使用例

No	カテゴリ	定義・使用例
意図的方法を用いた言葉がけ		
①	励まし	子どもの気持ちを安心させたり、奮起させたりするための言葉がけ 「大丈夫」「頑張れ」
②	指示的リード	子どもに何らかの行動をさせるための直接的なリード 「走れ」「追いつけ」
③	非指示的リード	子どもに何らかの行動をさせるための間接的な誘いかけ 「もう少し頑張ってみない?」「疲れてる人をねらってみたら?」
④	状況の説明	現象の記述、事実を客観的に述べたもの 「タッチされたよ」「(本人に向かって)○○ちゃんが鬼だよ」
⑤	情報の伝達	周囲(他児)の様子や、先の見通しの言及 「あっちに余裕な人がいたよ」「後ろから鬼が来ているよ」

受容的方法を用いた言葉がけ		
⑥	繰り返し	幼児の言葉の繰り返し 幼児の「疲れた」に対して「疲れたね」
⑦	代弁	子どもが実際に言葉にしていけない気持ちや感情を明確化 「それで悔しかったんね」「タッチ出来なくて、残念だったんね」
⑧	相手への注目	相槌、感嘆、賞賛等、認めていることを示すもの 「おー、すごい、すごい」「そっかー」
⑨	発問	子どもの行動や気持ちを明確化するための問いかけ 「今タッチしたの?」「まだ痛い?」

#### ◆保育者の言葉がけ場面設定

保育者の言葉がけは幼児の鬼ごっこにおいて、以下の4場面を設定した。

##### 場面Ⅰ. 言葉がけ無し

保育者には、鬼ごっこ中の予期せぬトラブル等により、どうしても言葉がけが必要な状況を除いて、極力言葉がけを行わないように心がけてもらった。

##### 場面Ⅱ. 全体に向けた抽象的な言葉がけ

保育者には抽象的な言葉（ex.頑張り、走れ等）を使い、幼児の名前を呼ばず全体に向けた言葉がけを積極的に行うよう心がけてもらった。

##### 場面Ⅲ. 個人に向けた抽象的な言葉がけ

保育者には抽象的な言葉を使い、幼児の名前を呼んで個人に向けた言葉がけを積極的に行うよう心がけてもらった。

##### 場面Ⅳ. 個人に向けた具体的な言葉がけ

保育者には具体的な言葉（ex.手を伸ばして頑張り、休んでいる人を捕まえる等）を使い、幼児の名前を呼んで個人に向けた言葉がけを積極的に行うよう心がけてもらった。

#### 4) 測定項目及び方法

##### ◆保育者の言葉がけ

保育者の胸元にワイヤレスマイクを装着し、保育者の言葉とその周辺の音声をテープレコー

ダーにて録音した。また、言葉がけ時の保育者の位置や体勢等もビデオカメラにて撮影した。

##### ◆幼児の遊び行動

###### ①歩数、移動距離の測定及び解析

測定に供した万歩計は、山佐時計計器（株）デジ・ウォーカー BIG・EM-290（多機能）を用いた。万歩計は歩数以外の身体の余分な振動をカウントしないように、腰部にテープで固定し、鬼ごっこ時以外の歩数をカウントしないように、鬼ごっこ開始直前に装着、終了直後に取り外しを行った。

また、得られた結果は、t検定を用いて平均値（Mean）と標準偏差（SD）を求め、場面間の有意差の有無を調べた。

###### ②鬼ごっこに対する有能感、先生に対する受容感の測定

岡澤が作成した「幼稚園の運動遊び場面における有能感テスト」を参考に、鬼ごっこ用有能感・受容感テストを作成し、鬼ごっこ終了直後に全ての幼児を対象に実施した。回答形式は、有能感あるいは受容感の高い回答順に、4点、3点、2点、1点と得点化された。テスト項目、得点表は表3に示すとおりである。

なお、解析方法については、得られた結果から、t検定によって平均値（Mean）と標準偏差（SD）を求め、場面間の有意差の有無を調べた。

表3 鬼ごっこ用有能感・受容感テスト項目及び得点表

鬼ごっこに対する有能感因子					
番号	項目内容	4点	3点	2点	1点
1	鬼ごっこが楽しかったか	とても楽しかった	楽しかった	楽しくなかった	とても楽しくなかった
2	全力で走ることが出来たか	たくさん出来た	少し出来た	出来なかった	全然出来なかった
3	鬼から上手に逃げる事が出来たか	とても上手に出来た	少し上手に出来た	下手だった	とても下手だった
先生に対する受容感因子					
5	先生と一緒に鬼ごっこをしていると感じたか	すごく感じた	少し感じた	感じなかった	全然感じなかった
6	先生が自分を応援してくれていると感じたか	すごく感じた	少し感じた	感じなかった	全然感じなかった
7	先生の声かけのおかげで頑張れたと思うか	すごく思う	少し思う	思わない	全然思わない

この他、ビデオカメラ撮影により、保育者の言葉がけに対する幼児の発言内容や表情、行動等の変化の観察を行った。

### 3. 測定の結果および考察

#### 1) 保育者の言葉がけ分析

本研究では、保育者の言葉がけについて4つの場面を設定したが、各場面の設定条件にあった実際の言葉がけ内容は保育者の自己判断のもと行っていた。

そこで、各場面における鬼ごっこ時の保育者の言葉がけの特徴を見るために、また、得られた結果から鬼ごっこ中の様々な状況に適した言葉がけ内容を明らかにするために、各場面における言葉がけをカテゴリー化した。

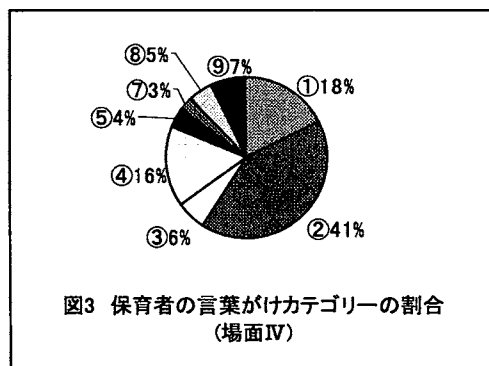
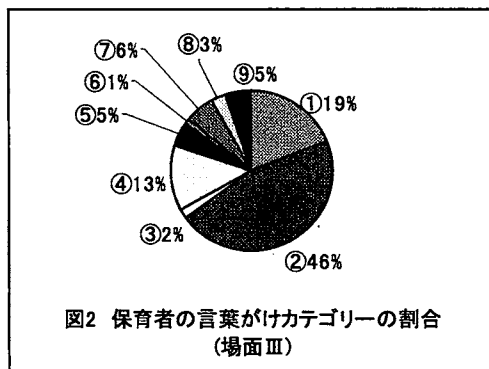
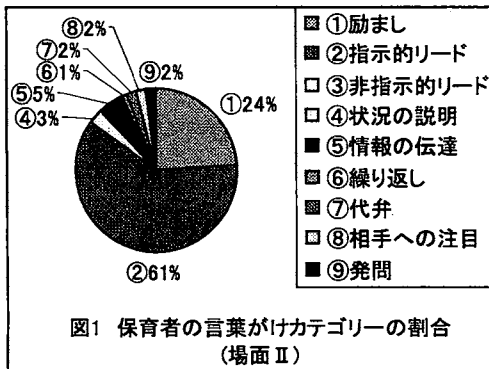
#### ◆保育者の言葉がけカテゴリーの割合

場面ごとの保育者の言葉がけの特徴を見るために、場面Ⅱ（全体への抽象的な言葉がけ）、場面Ⅲ（個人への抽象的な言葉がけ）、場面Ⅳ（個人への具体的な言葉がけ）でそれぞれ得られた言葉がけをカテゴリー化し、場面ごとに各カテゴリーの割合を抽出した。図1～3は、各場面

で得られた保育者の言葉がけカテゴリーの割合を示したものである。なお、場面Ⅱでは172ユニット、場面Ⅲでは152ユニット、場面Ⅳでは200ユニットの言葉がけが得られた。また、個人への言葉がけの割合に関しては、場面Ⅱでは10%、場面Ⅲで60%、場面Ⅳでは55%であった。

図1～3より、各場面で言葉がけの条件は違うものの、共通して①励ましと②指示的リードで全体の50%以上を占めていることが分かる。また、Ⅱ場面からⅢ場面、Ⅳ場面への移行に伴い、徐々に③非指示的リードや④状況の説明、⑧相手への注目、⑨発問の割合が増加していることも見て取れる。

これらのことから、以下のようなことが推察される。まず、保育者の中には常に幼児に対する暖かい思いや、してほしい行動が明確に存在しており、このことが鬼ごっこ時においてほとんど絶え間なく①や②の言葉がけを行うことにつながり、全場面でこれらのカテゴリーが50%以上を占める結果に結びついたのではないだろうか。さらに、ビデオ撮影や自然観察の結果から、①や②の言葉がけを腕振りなどの動作も加



えながら気持ちを込めて頻繁に行うことによって、幼児の心によりいっそう保育者の言葉がけが響き、鬼ごっこの雰囲気をよくしたり、遊び内容を充実させることにつながると考えられる。

また、幼児全体にしてほしい行動を伝える場合は、③を用いて疑問形で間接的に指示を行うよりも、②を用いて命令形で直接指示を出す方が効果的である。しかし、保育者が一方的に直接指示を出すばかりでは、幼児の自ら考える力

や主体的に遊びに関わる態度の成長を阻害する恐れがあると考えられる。そこで個人への言葉がけでは、③や④を用いて、直接指示を出すのではなく、してほしい行動に導くためにヒントを与えたり、間接的に誘いかけたりして、幼児の気持ちを尊重し、考える機会を与えることが大切である。今回、実験に協力していただいた保育者は、場面ⅡからⅢ場面、Ⅳ場面への移行、つまり全体から個人に対する言葉がけへの移行に伴って、③や④の割合が増加しており、上述したことがしっかりと行われていたことが分かる。また、受容的方法を用いた言葉がけについても、鬼ごっこのような多くの幼児がそれぞれ激しく動き回る状況下で、全体に対して行うことは難しいが、特に子どもの受容感を育てるために重要であると言われている。保育者は、全体に対して受容的方法を用いた言葉がけが十分に出来ない分、個人への言葉がけでは、全体を見渡し、それぞれの幼児の行動をしっかりと観察し、⑦や⑧を用いながら幼児一人ひとりに合った受容的な言葉がけを行い、幼児をしっかりと受けとめていた。

#### ◆トラブル時による言葉がけ

鬼ごっこは、多くの幼児が夢中になっているんな方向に走り回るため、他児にぶつかったり、転んだり等のトラブルが起こりやすい。このようなトラブル時に保育者の様々な言葉がけはとても重要な役割を果たすと考えられる。そこで、トラブル時における幼児の様々な発言や表情、行動にはどのような言葉がけが適しているのかを明らかにするために、場面Ⅰで得られたトラブル時の保育者、幼児の発語記録及び行動記録を例に考察を行った。なお、場面Ⅰは言葉がけ無しの条件設定であったが、鬼ごっこの途中に他児とぶつかり、転んで泣き出した幼児(S君)がおり、言葉がけが必要な状況であったため、保育者にはS君に対してのみ言葉がけを行っていただいた。事例1は、この時の保育者の言葉がけ、S君の発語記録及び行動記録を示

## 事例1 トラブル時の保育者言葉がけ、S君の発語及び行動記録

S君	(友達とぶつかり転ぶ、頭をおさえながら保育者の前に来て) 「痛い、痛いよー」(しゃがみこんで、泣き出す)
保育者	「S君、頑張れ、頑張れ」①(立ったまま、腕を振って走っている真似をしながら)
S君	「痛すぎるよー、もう出来ないよ」(さらに激しく泣き出す)
保育者	「そういうこともある、今先生見てたけど、そういうこともある」④ 「大丈夫、大丈夫①、大きな事故じゃないから④大丈夫」① 「みんなばらばらに走ってるからね⑤、そういうこともあるんだ」④ (しゃがみこんで、S君と目線を合わせて) 「さっきYちゃんも転んだの⑤、S君頑張れ」①
S君	「やっぱり痛い、痛いよー」
保育者	「そっかー⑧、痛いね」⑥(S君の頭をなでる) 「でも、たんこぶ出来てないよ④、痛いけど⑥がんばれ」①
S君	(泣き止んでもう一度走り出す、しかししばらくして、再度保育者の所に戻ってくる) (泣きながら)「やっぱり、立ったら痛いよー」
保育者	「そっかー⑧、立ったら痛いんやね⑥、分かった、分かったよ⑧」 「なら休んどる?⑨」
S君	(だまってうなづく)
保育者	「分かったよ、それでもS君はこの前より成長して頑張れるようになったね」⑧ (鬼ごっこが終了する)

したものである。

事例1において、S君が泣き止んで走り出すまでの保育者の言葉がけカテゴリーは、意図的方法を用いた言葉がけがほとんどであり、中でも①励ましが最も多くなっている。また、客観的に見た鬼ごっこの様子をS君に伝えることで、友達とぶつかって転んでも仕方ないと納得させようとしたり、他に転んだ幼児のことを伝え、「自分ももう一度頑張ろう」という気持ちを奮い立たせようとしている。ここまでの言葉がけ内容から、保育者はS君の転んだ時の様子や怪我の状況から、我慢できる痛さだと判断し、S君に対する思いとしては、痛いからといってすぐに諦めず、時には我慢して頑張ることが大切であることに気づいてほしい、そして主体的に自ら、また鬼ごっこに参加してほしいというものであることが分かる。この思いが、保育者の言葉がけによってS君の心に響き、動かし、再

度鬼ごっこに参加しようという意欲につながったと考えられる。

しかし、S君がしばらくして再び保育者のもとに戻って来てからは、受容的方法を用いた言葉がけのみと変化し、⑧相手への注目が最も多くなっている。つまり、保育者は再び痛みと訴えてきたS君に対して、これ以上頑張ることを強制せず、S君の訴えを受け止め、共感し、前との比較によりS君の成長や頑張りを褒めている。

S君は最後まで鬼ごっこを続けることは出来なかったが、鬼ごっこ直後に行った有能感・受容感テストでは項目4を除いて(項目4は未回答)、その他の全項目が4点であった。この結果と以上の保育者の言葉がけの分析から、保育者のS君に対する励ましやS君の訴えや頑張りを心から認め、発した言葉がけはS君の心に伝わり、保育者に対する受容感因子の得点をあげることに繋がったのではないかと考えられる。

## 2) 幼児の運動量分析

鬼ごっこ時における幼児の行動を観察すると、3分間ほとんど休まずに走り続ける幼児や途中で壁に張り付いて休憩している幼児、鬼が自分の所に来ず、つまらなさそうにウロウロしている幼児、保育者に頻繁に話しかけている幼児など、様々な行動が見られた。こういった行動の違いに伴い、鬼ごっこ中の運動量にも個人によって差が出てくると考えられるが、上述したように保育者の言葉がけは幼児の気持ちや行動

に大きな影響を与え、その結果運動量を変化させることにつながると考えられる。そこで場面ごとに得られた測定結果を、歩数値と移動距離値に分け、表とグラフに示した。そして、表とグラフをもとに、保育者の言葉がけが幼児の運動量に及ぼす影響についての考察を行った。

### ◆歩数による運動量測定

表4、図4は場面ごとに得られた歩数値の測定結果を示したものである。

表4 各場面の平均歩数値及び標準偏差

(n=19)	場面 I		場面 II		場面 III		場面 IV	
	Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD
	501.1	102.8*	478.0	109.5	418.9	83.6	465.3	71.1*

\* vs.場面III (p<0.05)

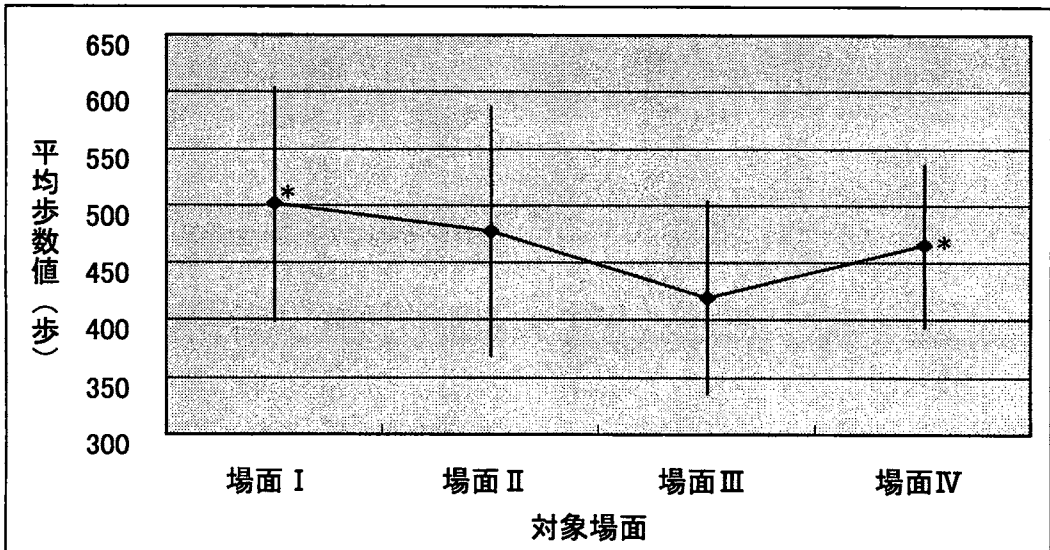


図4 各場面における歩数値の t 検定結果

予想では、保育者の言葉がけが場面 I から場面 IV へ移行するに伴い、幼児の平均歩数値は増加するというものであったが、結果は予想に反したものとなった。表4、図4より場面 I と場面 III の間、場面 III と場面 IV の間で有意差が生じ

ていることが分かる。この結果から、場面間の有意差の要因は保育者の言葉がけのみであるとは考え難く、言葉がけ以外のものが大きく影響しているのではないかと考えられる。この要因をビデオ撮影や自然観察をもとに予想すると、

まず、場面Ⅲより場面Ⅰの方が、有意に平均歩数値が高かったという結果に対しては、一つ目の要因として実施日の関係が考えられるであろう。測定は、場面Ⅰから場面Ⅲにかけて3日間連続で行っており、1日目は久しぶりの大人数での鬼ごっこに対して、新鮮さやわくわくする気持ちがあり、全体的にすごく楽しんで元気いっぱい走り回っている姿が観察された。しかし、徐々に単調な鬼ごっこに飽きてきた幼児等が見られるようになり、このことが平均歩数値を下げる結果につながったのではないかと予想される。

また、二つ目には測定前の幼児の活動状況の関係が挙げられる。測定日によって、測定前に幼児が行った身体の運動を伴う遊びや活動は異なり、それに伴って測定前の身心の疲れ具合も異なる。あくまでも推測であるが、場面Ⅲ実施日の測定前の幼児の活動内容が1番ハードであったと思われ、このことが平均歩数値を下げる結果につながったのではないかと予想される。

また、場面Ⅲより場面Ⅳの方が、有意に平均歩数値が高かったという結果に対しても、一つ目に実施日の関係が挙げられるであろう。場面Ⅲと場面Ⅳの実験実施日の間は1日空いたため、鬼ごっこに対する幼児の飽きが緩和され、このことが平均歩数値を上げる結果につながったのではないだろうか。二つ目も、上述したものと同じことが挙げられる。しかし、例えば場面Ⅲでは鬼の幼児に対して「捕まえろ」という抽象的な言葉がけが場面Ⅳで「あそこで休んでいる人たちを捕まえろ」という具体的な言葉がけに変化したことによって、幼児の中で目標が明確になり、勢いよく走り出す姿を観察出来たり、

場面Ⅳで「○○君なら速い人でも捕まえられるよ」という受容的な言がけを受けたことによって、さらにやる気を出し、タッチ出来るまで力いっぱい走り回っている幼児の姿などがいくつか観察された。このように、保育者の幼児一人ひとりに合った言葉がけによって、幼児の行動が変化し、歩数値の増加につながったと考えられる場面がいくつか見受けられたため、場面Ⅲと場面Ⅳの間における有意差は保育者の言葉がけの影響も大きいと考えられる。

以上のように、本実験では幼児の平均歩数値の変化について保育者の言葉がけ以外の要因もいくつか考えられ、保育者の言葉がけの影響だけによる幼児の歩数値の変化について正確に測定することは困難であった。しかし、ビデオ撮影や自然観察から幼児の中には保育者の様々な温かい言葉がけや指示によって、勢いよく走り出したり、上手に逃げたり、捕まえたりする姿が数多く観察されたため、全体として予想通りの結果は得ることが出来なかったが、幼児一人ひとりを見た場合、保育者の言葉がけが幼児の歩数値に及ぼす影響についていくつも見る事が出来た。

#### ◆移動距離による運動量測定

表5、図5は場面ごとに得られた移動距離値の測定結果を示したものである。

表5、図5から分かるように、t検定で有意差が認められたのは場面Ⅰと場面Ⅲの間、場面Ⅲと場面Ⅳの間であり、歩数と同様の結果が得られた。移動距離は歩数値と歩幅との計算によって求められ、歩数と移動距離は密接な関係にあることから、移動距離の場面間の有意差も

表5 各場面における平均移動距離及び標準偏差

(n=19) 場面Ⅰ		場面Ⅱ		場面Ⅲ		場面Ⅳ	
Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD
211.3	60.6*	199.4	59.7	175.6	49.7	195.6	50.9*

\* vs.場面Ⅲ (p<0.05)



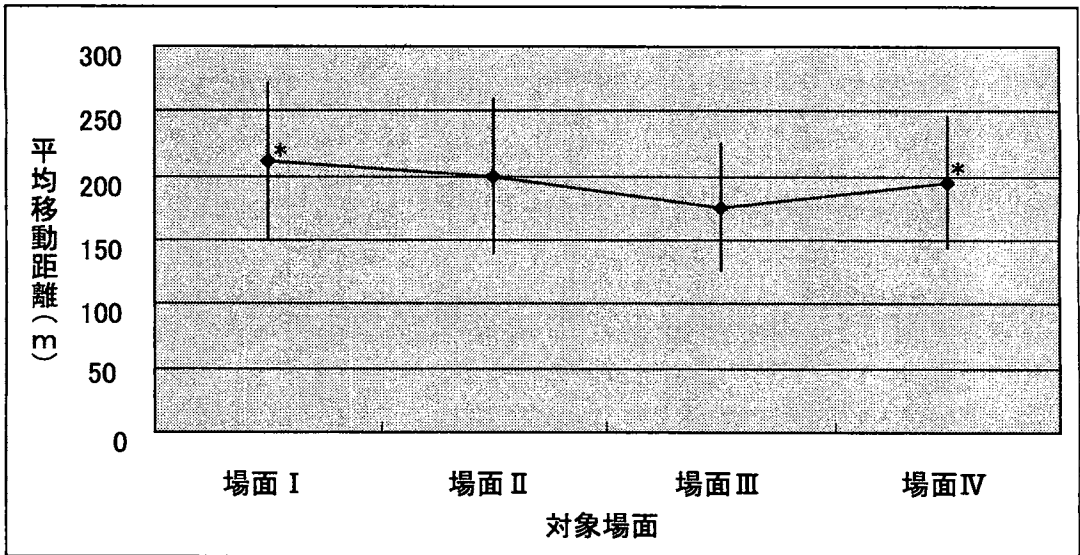


図5 各場面における移動距離の t 検定結果

上述した要因が大きく関係していると考えられる。

しかし、移動距離の場合、歩数が多くても歩幅が小さいと移動距離の値が小さく出たり、逆に歩数が少なくても歩幅が大きいと移動距離の値が大きく出たりするため、必ずしも歩数値最大幼児と移動距離値最大幼児が等しいとは限らない。

歩数と同様に、保育者の言葉がけの影響だけによる幼児の移動距離値の変化について正確に測定することは困難であった。しかし、プレイルームという限られた空間の中で、保育者が遠くの方を指差しながら「あの端までダッシュで逃げるんだよ」とか「奥の壁にくっついている子を捕まえておいで」など、保育者の言葉がけの中には幼児自身には意識させずに移動距離を伸ばすことが出来るものがいくつか含まれており、保育者の言葉がけによって移動距離値が伸びたと思われる事例をいくつか得ることが出来た。

### 3) 有能感・受容感テスト結果分析

鬼ごっこ時や終了直後の幼児の表情や態度、

発言等に注目してみると、とても満足そうな表情の幼児やつまらなさそうにしている幼児、「楽しかった」「もっとやりたい!」と言っている幼児など、様々な姿を観察することが出来た。こういった鬼ごっこ時や終了直後に見られる様々な幼児の表情や態度、発言等は、幼児自身の鬼ごっこに対する有能感や先生に対する受容感が密接に関わっていると考えられるが、上述したように保育者の言葉がけは幼児の有能感や受容感に大きな影響を及ぼすと考えられる。

そこで、得られた有能感・受容感テストの結果を表に示した。そして、表から保育者の言葉がけと幼児の有能感、受容感の関連性についての考察を行った。

#### ◆鬼ごっこに対する有能感

表6より、各場面の1～4項目どれを見ても、平均点は3点以上であり、鬼ごっこに対する有能感が比較的高い幼児が多いことが分かる。しかし、t検定によって有意差が認められたのは、項目3の場面IIと場面IVの間のみであり、保育者の言葉がけによって幼児の鬼ごっこに対する有能感が高まるという予想通りの結果を得るこ

表6 各場面における項目得点の平均と標準偏差

	場面Ⅰ		場面Ⅱ		場面Ⅲ		場面Ⅳ	
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD
1. 鬼ごっこが楽しかったか	3.8 ± 0.7		3.5 ± 1.1		3.5 ± 1.0		3.8 ± 0.4	
2. 全力で走ることが出来たか	3.6 ± 0.7		3.5 ± 0.9		3.5 ± 0.8		3.4 ± 0.8	
3. 鬼から上手に逃げる事が出来たか	3.1 ± 0.9		3.6 ± 0.5		3.2 ± 1.0		3.1 ± 0.9*	
4. 鬼になった時、上手に捕まえることが出来たか※	3.7 ± 0.6		3.3 ± 0.9		3.5 ± 0.9		3.5 ± 0.8	
鬼ごっこに対する有能感因子	14.2 ± 2.4		13.8 ± 2.3		13.5 ± 2.3		13.8 ± 1.8	
5. 先生と一緒に鬼ごっこをしていると感じたか	2.2 ± 1.1		2.1 ± 1.3		2.3 ± 1.4		2.5 ± 1.4	
6. 先生が自分を応援してくれていると感じたか	2.7 ± 1.2*		1.8 ± 1.2		2.3 ± 1.2		2.7 ± 1.2*	
7. 先生の声かけのおかげで頑張れたと思うか	2.6 ± 1.1		2.7 ± 1.2		2.2 ± 1.2*		2.9 ± 1.3**	
先生に対する受容感因子	7.6 ± 2.9		6.6 ± 3.4		6.7 ± 3.4		8.2 ± 3.6	

※項目4については、回答対象児が鬼になった幼児のみに限定されるため、未回答であった幼児の得点は、回答幼児から得られた平均値を代入した。

\* vs.場面Ⅱ (p<0.05)

\*\* vs.場面Ⅲ (p<0.05)

とは出来なかった。

あくまでも予想であるが、その理由の一つとして考えられるのは、本測定に協力していたクラスの幼児は何度も鬼ごっこをしたことがあり、ルールをしっかりと理解していたり、上手な捕まえ方や逃げ方を知っている幼児が多いため、保育者の言葉がけの有無に関係なく鬼ごっこが成り立ち、楽しむことが出来ることが多いということが挙げられるであろう。

また、二つ目の理由として、Benenson & Dweek<sup>4)</sup> が述べている幼児期の運動有能感の特徴による影響を述べる事が出来るであろう。彼らは、幼児期は有能感を高く認知する傾向があり、それは低年齢ほど他者評価を上回って認知することを報告している。この傾向は本研究でも見られ、このような自己認知の特性が言葉がけ場面に関係無く、有能感が比較的高くなった結果につながったのではないかと考えられる。

そして、三つ目の理由として、今回テストを実施して明らかとなったいくつかのテスト方法に関する問題点も挙げる事が出来るであろう。

しかし、例えば場面Ⅳにおいて、「○○ちゃん、後ろから鬼が来てるよ」という保育者の言葉が

けによって、鬼から上手に逃げる事が出来たり、「○○くん、あっちで休んでいる子を捕まえておいで」という言葉がけによって鬼を交代することが出来た幼児の有能感項目点数の変化を見たとき、場面Ⅰよりも高まるという結果を得ることが出来た。このように、幼児一人ひとりを見た場合、有能感の高まりは保育者の言葉がけが影響しているのではないかと思われるケースがいくつか見受けられた。よって、保育者の言葉がけは、幼児の心にしっかりと伝わり、言葉がけに添った行動を達成することが出来た時などに幼児の有能感を高める役割を果たすことが出来ると考えられる。

#### ◆先生に対する受容感因子

表6より、t検定によって有意差が認められたのは項目6の場面Ⅰと場面Ⅱの間、場面Ⅱと場面Ⅳの間、項目7の場面Ⅲと場面Ⅳの間であることが分かる。この中で、言葉がけによって先生に対する受容感が高まるであろうという予想と一致した結果となったのは、項目6の場面Ⅱと場面Ⅳの間、項目7の場面Ⅲと場面Ⅳの有意差であり、項目6の場面Ⅰと場面Ⅱの間の有意差については予想に反したものとなった。場

面Ⅱの項目6の平均点が大きく低下している要因についてビデオ撮影や自然観察の結果から明らかにしようと試みたが、明らかにすることは出来なかった。

予想通りの結果が得られた有意差について、さらに詳しく見てみると、場面Ⅳにおいて保育者から積極的に名前を呼んでの言葉がけを受けていた幼児の受容感が他の場面と比べて大きく高まっているという結果を得ることが出来た。このことから、名前を呼んで言葉がけを行うことは、「先生は自分に言っているんだ」と言葉がけされた幼児が感じやすく、全体への言葉がけの時よりも耳を傾け、しっかりと聞こうという姿勢になり、保育者の言葉がけが幼児の心に伝わりやすいということが予想される。

今回のテストより、予想通りの結果はいくつか得ることが出来たが、受容感全体ではt検定より有意差を得ることが出来なかった。この理由として、ビデオ撮影や自然観察をもとに予想すると、鬼ごっこのような多くの幼児が騒ぎながら激しく動き回る状況下では、保育者の言葉がけがしっかりと伝わりにくい時もあることや、言葉がけを受けた時は先生に対する受容感を感じていたとしても、何分か経つと受容感が薄まってしまう場合があること、そして今回テストをして明らかとなったテスト方法に関する問題点などが挙げられるのではないだろうか。

#### 4. まとめ

本研究では、鬼ごっこ時において保育者の言葉がけが幼児の運動量や鬼ごっこに対する有能感、先生に対する受容感に与える影響について明らかにしようと試みた。測定対象児全体の運動量や有能感、受容感得点の平均値は、保育者の言葉がけ場面がⅠからⅣへ移ることに伴って、有意に高まるという結果は得ることが出来なかったが、ビデオ撮影や自然観察から幼児一人ひとりを見た場合、保育者の言葉がけが幼児の気持ちや表情、行動などに影響を与えている場面が多々見受けられ、このことから子どもの心

身の発育・発達において、保育者の言葉がけがとても重要な役割を担っていると考えられる。

また、本研究に協力していただいた保育者は、その時の状況や幼児の発言、表情、行動を素早く判断し、その場に適した言葉がけを行っていた。上述したように、杉村・桐山は、保育者の言葉がけ方法には意図的方法と受容的方法があることを示しているが、本研究の保育者の言葉がけ内容の分析から、鬼ごっこという多くの幼児が騒ぎながら激しく動き回る場で、幼児全体や一人ひとりに言葉がけを行う場合には、保育者の言葉がけカテゴリー①～⑤、つまり意図的方法の言葉がけが、幼児の行動を活発にさせたり、鬼ごっこという遊びを充実させるのに有効的であり、トラブル時(例えば転んで泣いている子に言葉がけを行う場合)には、意図的方法を用いて、保育者の思いを一方向的に伝えたり、導いたりするのではなく、保育者の言葉がけカテゴリー⑥～⑨の受容的方法も取り入れながら、幼児の気持ちを落ち着かせ、先生に対する受容感を高めた上で、間接的に誘いかける③非指示的リード等を用いることが適しているということが分かった。

そして、ビデオ撮影や自然観察の結果から、言葉がけの内容や状況によって、声の大きさやトーン、表情や目線の高さなどを変えることが必要であり、このことが保育者の言葉がけが幼児の心にしっかりと伝わる大きな要素なのではないかと感じた。

#### 5. 今後の課題

本研究は事例研究であり、保育者の言葉がけが幼児の運動量や有能感、受容感に及ぼす影響について一般化出来たとは言えない。特に、保育には決まった型が無いこともあり、保育者の態度(言葉がけ内容等)には大きな個人差があり、また、幼児一人ひとりにも違った個人特性がある。今回は、本実験に協力していただいた保育者の保育観や普段の言葉がけの特性、幼児一人ひとりの個人特性をしっかりと押さえること

が出来ておらず、その上での比較検討である。また、実験を行うことで明らかとなった運動量の測定や有能感、受容感テストの方法にもいくつかの問題点をふまえ、実験方法については今後見直す必要がある。

しかし、本研究では様々な事例から保育者のどのような言葉かけ内容や態度が、幼児にどのような影響を及ぼすかを学ぶことが出来、今後幼児教育の研究を進めていく上でとても貴重な経験となった。今回の研究で学んだことを生かしながら、今後は、幼児の個人特性に着目した保育者の言葉かけの影響についての研究や、保育者の言葉かけに対する子どもの反応に重点をおいた研究なども行ってみたいと思った。

## 謝 辞

本研究の実施にあたり、ご協力いただきました金大附属幼稚園の先生方、園児の皆様、に心より感謝いたします。

## 参考文献

- 1) 岡澤哲子 (1996) 「幼稚園の運動場面における有能感テストの作成」 スポーツ教育学研究 16 (1) pp.63-72
- 2) 山崎晃・樟本千里 (2002) 「子どもに対する言語的応答を観点とした保育者の専門性」 保育学研究第40巻第2号 pp.90-96
- 3) 杉村伸一郎・桐山雅子 (1991) 「子どもの特性に応じた保育指導—Personal ATI Theory 実証的研究—」 教育心理学研究(39) pp.31-39
- 4) Benenson, J.F. & Dweck, C.S (1989), The development of trait explanations and self-evaluations in the academic and social domains, Child Development (57) pp.79-87
- 5) 阿部直美 (2006) 「保育者の言葉かけにみる子どもの主体性の育みについての考察」 大阪樟蔭女子大学人間科学研究紀要 pp.89-94
- 6) 朴淳香・岩崎洋子 (2005) 「幼児期の運動技能・運動能力と運動有能感・身体動欲求の関連と特性」 日本女子大学紀要・家政学部第52号 pp.9-14
- 7) 岡澤哲子 (2004) 「幼児の運動遊びでの有能感形成におよぼす保育者の言語活動の影響について」 人間文化研究科年報 pp.229-243
- 8) 岡澤哲子 (2004) 「保育者の言葉かけが幼児の遊び行動に及ぼす影響について有能感を高める試みを通して—」 名古屋学芸大学短期大学部研究紀要 pp.133-140
- 9) 千葉正 (2002) 「幼児の運動遊びについての研究—園内での行動特性別による自由遊びの活動内容及び運動量の調査について—」 修紅短期大学紀要(24) pp.27-41
- 10) 千葉正 (2002) 「幼児の運動遊びについての研究(2) 一万歩計歩数からみた幼児の自由遊びにおける運動量—」 修紅短期大学紀要 pp.27-41
- 11) 斉藤義明 (1994) 「幼児の運動的活動のリズムについて—一万歩計を用いた保育における幼児の運動的活動の研究—」 日本保育学会大会発表論文抄録(47) pp.450-451
- 12) 岡澤祥訓 (1991) 「小学校体育授業における教師の言語的活動に関する研究」 平成2年度文部科学省学研究(一般B) 研究成果報告書 pp.40-67

## 付 記

本研究は、本学の学部学生による優れた研究を奨励するため設けられた平成18年度「学長研究奨励費」を得て行われた、教育学部学校教育教員養成課程岩崎裕香の研究である。金沢大学教育学部附属幼稚園中野淳子教諭と忍久保武士教諭には研究に関わって多くのアドバイスやご協力をいただいた。記して感謝を申し上げたい。なお、本論文の文責や研究上の責任は指導教員としての大久保が負うが、その業績は岩崎裕香に帰するものであることを明記しておきたい。